

「私の考える地域力創造のポイント」

総務省地域力創造アドバイザー、前自治財政局長、
元地域力創造審議官（初代）、内閣府地域活性化伝道師

椎川 忍

皆さんこんにちは。本日はお呼びいただきどうもありがとうございます。

私は奈良県が大好きでして、荒井知事さんも47人の知事さんの中でも好きな知事さんの一人です。この間も東アジア政府会合に呼んでいただきまして、人材育成のコーディネーターをさせていただきました。また今日も呼んでいただきまして本当にありがとうございます。

今日は時間が余らないので余分なお話はできませんが、最初に少しだけ自己紹介を兼ねてお話をしたいと思います。私が全国各地いろんなところを回っているわけですが、今日は富士北麓の国際コモンズ学会北富士大会というところから朝5時に起きてやってまいりました。そんなことをずっとやっているわけですが、いろんな地域を回って、いろんな人たちとお話をしたり、一緒に活動したり、幸せそうに暮らしている高齢者を見てきたりして、人間というのはどうやったら幸せになれるのかとか、どうやったらいい地域がつかれるのかということを考え続けてきました。2冊の本の中に私が経験したことが全て書いてありますが、これを1時間半で話すのは大変難しいので、今日はごくポイント、エッセンスをお話していきたいと思います。興味のある方は、ぜひ本を読んでいただきたいと思います。

〈 地域力は、資源力と人間力 〉

当たり前ですが、地域には人と物しかありませんから、地域力というのは資源力と人間力になるわけです。地域資源の中には天然、自然のものと、そこに長く人間が住んできているわけで、場合によっては何万年と住んできているわけですから、そこには人間力の蓄積である文化というものがあるわけです。この文化というのはカルチャーだけではなくて、経済のシステムとかインフラとかそういうものも全て含まれるということです。

人間力というのは何か。現在の人間力というのは皆さん方の自治体に5万人の人がいれば、5万人の人のやる気と能力を1人ずつかけ合わせて、それを足し上げたものです。ですからやる気がマイナスの人が一番困るのです。やる気のない人、あるいはみんなと反対を向いている人です。ですからできるだけ地域の中でみんなが力を合わせられるような土壌をつくっていくという、そのつながり力が非常に大事だと考えています。

地域資源は地域にあるものすべてといってもいいくらいたくさんあります。雪が降って困るとか、雨が多くて困るとか、災害が多くて困るとか、津波が来るとか言っても、それも地域資源なのです。そういうものは裏腹なのです。三陸海岸もあれだけ豊かな海だったということは、裏腹として百年に一度の津波が来るし、千年に一度の津波も来るということです。そういうことなのです。ということは、日本全体がそういうことで、自然と共生して生きてきた国なのです。自然の豊かさと裏腹に災害というものと抱き合わせに生きていかざるを得ない宿命を負っています。ですから、そういうものをどう活用するかというのは、結局、人間の力になるわけです。これを科学技術の力で抑え込もうとするのは、無理なのです。これは梅原猛さんの考え方と近いと思います。

人の力というのはトータルの地域の人たちの力ですから、先ほど言いましたΣになるんだということ。つながり力というのは災害があって最近をよく言われるようになりましたけれども、地域内でつながるといのは絆の再生です。今は外に向かってつながる力も非常に重要です。地域も孤立して閉鎖的な社会を形成しているわけではありません。また、分権とICTの時代ですから、外につながっていくネットワークの力も非常に重要だということになります。

〈 地域力は大元にさかのぼって考える 〉

本には絵を描いていますけれども、こういう人間力と資源力、いろいろ分解していくとこういうことで、これが都市集積になったり人口集積になったり経済力になって、それがまた2次的な地域力になり、循環して発展していくわけです。我々は今、ゼロから始めているのではなくて、この途中段階にある。これは上向いているらせんですからいいのですが、実は下を向いているらせんになっているところは大変なのです。いずれにしても、地域力を大元にさかのぼって考えないとだめなんだということです。

要するにほかの地域がうまくいっているから、例えば、上勝町の葉っぱビジネスがうまくいっているから、我々も葉っぱをやろうという発想は全然だめだということです。なぜ上勝町で葉っぱビジネスのようなものが生まれたのかという大元を考えないといけないということです。

〈 上勝町の地域力とは 〉

ご存じの方がおいでになるかもしれませんが、上勝町というのはごみ焼却場を持っていません。ごみ収集車も1台もありません。住民みずからごみ収集ステーションにごみを持ってきて、34分別をやります。お年寄りが持っていけないときは、みんなでコミュニティの中で助け合いをして、ボランティアも出かけて行って、ごみを持って行ってあげます。実はその日が集落の語り合いの日にもなっているわけです。

町内に1カ所あるごみ収集ステーション、年末年始しか休みはありません。そこに持って行って34分別します。そしてさらに非常勤職員とボランティアでそれを分別します。例

えばディスプレイのかみそりを捨てる場所があるわけですが、住民の人はその程度でほとんど捨てます。これを砕いてかみそりとプラスチックに分けるのは、非常勤職員とボランティアの人たちがやります。そして、ほとんどのものを資源化します。業者に引き取ってもらって資源化をします。ですからごみはものすごく少ない。コンポストの普及率98%ということで、生ごみはごみになりません。そういうことをやっていきますと、住民もごみを出さなくなるのです。1人1日1キロというのが日本の平均だそうですけれども、上勝町では大体400グラムしか出していません。しかも、34分別して資源化するわけですから、ごくわずかなものが焼却ごみとして残るのです。では、それをどうするのか。昔は小さな小型の焼却炉で燃やしてしたのですけれども、ダイオキシンの規制で燃やせなくなりまして、これは県外業者に持って行ってもらって、県外で焼いてもらっています。運搬料というのはすごく高いものですが、それができるほどにごみを減らしているということです。

そういうことを3代の町長が集落回りをやり、住民を説得してきた、そういう土壌の中に葉っぱビジネスというものがあるんだということを理解しないと、ただ葉っぱビジネスを真似してもだめです。その地域の人間力や資源力は何なのかということを考えていく必要があります。東京も江戸時代以前はただの野原で洪水の多いところだったのです。人間もまばらしかいなかったはずですが、それがなぜ世界に冠たる大都市になったのか。いろいろな要因がありますね。じゃあ沖縄はどうなのか。地方圏で唯一人口がふえている沖縄県はどうして人口がふえているのか。それを単に観光とか物産というのではなくて、もっと深く掘り下げて考える必要があると思います。

〈 全員参加で地域資源を総ざらえする 〉

これからやねだんの話もしますけれども、同じようなことです。あの人たちも、20年近く前には、もうどうにもならないと思ったのです。しかし、今では見事に人口がふえています。やねだんは地域の中にあるものだけを有効活用しながら全ての社会問題を解決しています。ですから、地域づくりをやる時に何をしたらいいかと言ったら、自分たちの地域の資源と人間の力をもう一回深く掘り下げて、総ざらいしてみないといけないということです。これにはワークショップとか、私が本で紹介している滋賀県立大学の上田洋平君がやっているふるさと絵屏風づくりとか、そういうことをやるのが有効です。これはワークショップの一種ですが、楽しくやれる。そういうことをやって、自分たちの地域のことを突き詰めないと、単に何かが使える、今ここにあるものが使えるではなくて、将来10年後にこれが使えるかもしれない。20年後に価値を生むかもしれない。今、朽ち果ててきたけれども、時代が変われば使えるようになるかもしれない。価値が復活するかもしれないということをやっていくということです。

全員参加の地域づくりは子供さんから高齢者まで全て参加していないとできません。地域を売るということ、地域の物産を買ってもらおうということ、地域に興味を持って人が来

てくれるということを考えるときには、いろんな消費者がいるわけですから、いろんな年齢層、いろんな職業の人たちが参加しないとだめなんです。企業経営と地域経営は通ずるものがある。例えばランチェスター戦略です。結局、人材を育成しないと何もできない。地域に人材が育っていないときはとりあえずレンタルでもいいのです。

〈 ICTを使わない地域おこしには限界がある 〉

ICTを使わない地域おこしには限界があります。葉っぱビジネスもそうですけれども、おばあちゃんがタブレットをぶら下げて裏山に行って、きょうは柿の葉が高いから、柿の葉を出そうかなとかやっているわけです。同じ葉っぱビジネスをしても、80歳のおばあちゃんがICTを使えるからできるわけです。今は横のネットワークの時代、地方分権の時代ですから、ICTを使わない地域おこしには限界があるということです。ですから高齢者にもICTのやさしい機能というのはきちんと覚えてもらう必要がある。

〈 歴史に学び人材育成と自立心の回復を 〉

一番大事なことは、歴史に学ぶということです。要点だけもう一回言いますと、人の真似をしていてもだめだということです。そのためには、地域資源と人間力を総ざらいしないとだめです。結局、地域経営は企業経営と同じです。だから、人材育成が大事です。歴史に学んで昔の江戸時代の藩というものを思い起こせば、どんなに貧しい藩でも藩校をつくって人材育成をし、今、皆さんの地域で特産物と言われるものは、たいてい江戸時代につくられているということです。きちんとそういうものを見出していく。自立心を取り戻すことも大切ですね。江戸時代というのは中央政府は地方からお金を取り上げるだけです。お金は1銭もくれません。お金を使わせるだけです。参勤交代もそう、江戸に来て城普請をやれとかいろいろ言われる。でも、その時代の地方の人たちの自立心はすごいではないですか。江戸時代に戻れとは言いません。江戸時代に戻れとは言わないけれども、この時代の自立心だけは取り戻してもらいたい。そうしないといくら補助金を出しても、いい制度をつくっても、地域は活性化しません。

〈 大切なのは内発的发展 〉

地域活性化のためには内発的发展論というのが基礎にならなければいけない。これは明治維新以来、脱亜入欧と内発的发展という2大潮流があったわけですが、どんどん脱亜入欧路線が強くなって、内発的发展路線というのは弱くなっているわけです。

内発的发展論というのは、簡単に言うと、日本には日本の、アジアにはアジアの发展方策があるはずだということです。しかし、これは私の解釈ですけれども、長年の鎖国後の明治維新、第二次世界大戦の敗戦で、日本は西欧に追いつくことに重点を置かざるを得なかった。だから、内発的发展論というのは常に陰に押しやられてきた。そのことが今の日本の地域社会あるいは社会の病弊を生んでいるのではないかと考えています。

〈 ハイブリッドな国家社会構造を 〉

グローバリゼーションの中で勝ち抜かなければいけないという経済至上主義が圧倒的に強い現状を私は憂えています。かつて我が国はハイブリッドな国家社会構造を持っていたし、これからもそうあるべきです。我々は先進国の中では圧倒的な少数民族です。先進国の中ではまれな稲作と漁労で国を成り立たせてきて、国土を守ってきた少数民族です。だから、独自の伝統文化があります。そういうものを大切にすれば観光面でも、産業面でも十分な可能性があります。今は外国人のほうがこういうことを知っているわけです。日本の若い人がどんどんこういうことを忘れようとしている。ですから、全部そうなれというわけではないのですが、こういうものをきちんと守りながらハイブリッドな国家社会構造という基礎を守った上でグローバリゼーションの中で勝ち抜く国をつくるというのが、もともと安倍さんの発想だったと思います。美しい国というのはそういうことだったはずで

す。ところが、どうしても経済を議論していると効率化一本槍、グローバリゼーションの中で勝つということが一番大事だというふう聞こえてきてしまうのです。これをやれば要するに高度経済期の過疎過密の問題、それから、日米経済構造協議で地方の中心市街地が疲弊した大規模店舗の問題などが再び起きるでしょう。いろいろ過去のことを学んでみれば、それだけをやっていけば地方が疲弊することが明らかです。だからそれをやる時には地方というものをまず守るといふ、これを守った上でグローバリゼーションの中で闘っていくという順番を間違っ

てはいけないと思うのです。順番を間違えますと、また同じ過ちを日本は繰り返して、大変な社会問題が起きることになると思います。サッカーに例えていけば、ディフェンスというものをしっかりやって、点を取りにいかない

〈 ネオ内発的發展へ 〉

とぼろ負けするわけです。日本の国のあり方もこれと同じことです。ディフェンスをしっかりとやった上で攻めに出ていかないと、ひどいことになる気がします。

今、我々はネオ内発的發展論ということ

を主張しています。これは、内発的發展論を基礎にしながら、外部の人材とかノウハウとか資本を内にあるものと結びつけることが簡単にできる時代になったので、これを活用しようということ

です。ICTと地方分権の時代ですからそういうことが可能になりました。これを唱えているのは明治大学の小田切徳美先生で、小田切先生が一昨年、イギリスのニューカッスル大学に研究留学したところ、イギリスではこれが既にできているということがわかったそうです。都会で成功した人はみんなふるさとに帰って事をおこす。企業を起こしたり何か業を始める。したがって、こういうことが自然にできるわけです。偉い人がふるさと、田舎に帰ってきて、何かをやりだせば人脈もあるし、ノウハウも持っているし、お金も持っている

のでネオ内発的發展になるわけです。そういうことがイギリスでは国民意識として定着している。日本は残念ながらそこまでまだいっていない。しかし、そういうムーブメントは起きつつある、理解され

つつある。したがって、我が国では政策的な後押しが必要だということで、地域おこし協力隊、集落支援員あるいはアドバイザー制度などいろいろやってきました。

〈 ネオ内発的發展＝「緑の分権改革」＝地域経済循環創造事業 〉

我々がやってきた「緑の分権改革」は民主党時代の名称ですけれども、結局はネオ内発的發展論だということです。自公政権になってこれをやめてしまったのかということ、やめられるわけがありません。地方の発展方策は、基本的にこれしかないのです。明治時代から言われていることです。そして今、ICTと地方分権でさらにこれを外と結びつけてやることができるようになった。地域の発展の基盤というのはこれしかないのだから、自公政権になってもやめられるわけではないので、名前は変わったけれども、補正予算で25億円の予算が計上されています。地域経済循環創造事業です。こちらのほうがわかりやすい人もいるかもしれませんね。地域の経済をもう一度中で回るようにやっていきましょう。その手助けを交付金でやりますよということで25億円の予算をつけているわけです。

だから考え方は全く一緒です。名前のつけ方が民主党の場合は斬新な、奇をてらったようなつけ方になっているだけです。言葉は変わっても政策理念は変わらない。これだけでは日本全体は発展できませんけれども、ハイブリッドな国家社会構造にしていくべきだということです。歴史に学ぶということでもあります。

一番大事なことは、私たちは原発事故や大災害が起きる前に本当はこういうことに気がつくべきだったということです。

結局、ハイブリッドな国家社会構造の構築を目指すというのが、「緑の分権改革」の根本思想です。これは別に原口さんが言ったわけではありませんけれども、有識者会議を組織して大森弥先生ですとか小田切徳美先生、宮口伺廸先生も入っていたかもしれません。安田喜憲先生とか月尾嘉男先生とか、いろんな人に議論してもらった結果、結局は先ほど言いました内発的發展というものをもう一度少し取り戻そうということになったわけです。超近代主義と脱近代主義のバランス、原発と再生可能エネルギーのバランスなども重要なことです。

〈 トリクルダウンとファウンテンモデル 〉

トリクルダウンというのはアメリカの新自由主義の考え方で、大きな企業が発展すれば奈良県の人たちもみんな幸せになれるはずだ。経済はつながっているのだから、何がしかの恩恵はあるという考え方です。東京が発展すれば奈良も発展するだろうという考え方です。

ところが、それだけでは難しいのではないかと。やはり地域にあるものを生かして、いろんな津々浦々から富が湧き上がるような構造にしていくべきではないかというのがファウンテンモデルです。これはどちらかが100%正しいということではないのです。私はトリクルダウンが大体8割ぐらいでいいと思っています。でも、今、日本を見るとトリクルダウ

ン100%でいこうとしている人たちが結構多いと思う。だからファウンテンモデル20%を取り戻しましょうよということを申し上げている。お金の価値に換算して何でも市場で取引できるというのは、素晴らしいシステムですが、日本には昔からあった。人のつながりとか信頼関係で物事を解決していきましょうということもなければ困ります。もし、トリクルダウン100%になるとしたら、お金さえあれば何でもできるという世の中になるのです。お金の価値に換算して市場で取引が何でもできるということは素晴らしいシステムですが、それが全てだと思ったら大間違いになる。グローバルな経済競争も大事だけれども、日本は先ほど言いました先進国では少数民族なので、日本にしかないいいところがたくさんあるので、これを大事にしたい。そうすればグローバルな経済競争の中でも売れるものがたくさんある。観光客も増えるということなのです。

きのうも富士山のふもとでコモンズ世界大会のバンケットパーティーをやっていたら、外国の人たちが樽酒を結構楽しそうに飲んでいるのです。山梨県の人が来て輸出用のワインですとか、いいワインをいっぱい並べて試飲させているわけですがけれども、外国の人たちは樽酒を升で飲んでいるわけです。そういう時代になっているのです。

〈 日本酒の海外輸出プロジェクト 〉

私は実は日本酒の海外輸出プロジェクトにもかかわらせていただいているのですけれども、民主党政権の時代にこれが国家プロジェクトになりました。國酒プロジェクトです。奈良県は日本酒醸造の発祥の地です。そして、日本酒の醸造技術ほど素晴らしい技術は世界にないのです。だから杜氏さんという人たちがいたり、水と米のハーモニーでその土地独特のお酒の味ができてきたりするわけです。今はとてもいいお酒ができるので、これをワインの流通ルートに乗せようということをやっています。

ロンドンのIWCというコンペで日本酒部門をつくりまして、6年目に入っています。ここでの「チャンピオンサケ」というのは1本しか出ないのです。日本の新酒鑑評会のように金賞がたくさん出るというわけではなくて、1本しか出ない。部門別に本醸造、純米、吟醸、大吟醸、古酒、この5部門で、まず1本ずつトロフィー酒が出ます。これは6月に決まる。ことしももうすぐですね。そしてこの中から「チャンピオンサケ」が1本だけ決まるのです。

これはすごい経済効果と地域活性化の効果をもたらしています。佐賀県に鍋島というお酒があるのですが、一昨年、大吟醸鍋島が「チャンピオンサケ」になりました。鍋島のある鹿島地区には6社ぐらい酒蔵があるのですけれども、蔵開きのイベントに今まではぼつぼつしか人が来ませんでした。毎年、3月末にやっていたのですが、その年は土日に3万人のお客さんが来まして、6つの酒蔵の酒が全部売り切れてしまうという大変なことになりました。

去年は私の地元の秋田の湯沢ですけれども、福小町というお酒が「チャンピオンサケ」になりまして、もうどこを探しても一切ありません。秋田は酒どころですからもう少しこ

れを活用したほうがいいと思うのですけれども、残念ながら佐賀のように活用できていません。観光庁もそういうことに非常に力を入れていただいています。あるものを高く売る。素晴らしい技術を、それから、その独特のストーリーを売るわけです。これはアニミズムという我々日本人の根本と結びついたものではないですか。ですから、我々が外国の宗教を理解するのと同じように、海外の人たちは日本酒というものがどういうものであるかに非常に興味を持って勉強しているわけです。そして、こんな素晴らしい醸造技術、そしておいしくて健康的な日本食も今、注目をされていますし、それに合う日本酒が売れないはずがないわけです。日本酒の流通ルートを世界中に新たにつくるのは大変なことですが、ワインの流通ルートに乗せるのは案外簡単なことで、1本5,000円の大吟醸酒がカジノとかそういうところでは今、10万円という高値で売られています。そういうことになってくるのです。

〈 地域にあるものを生かし、ハイブリッドな複線構造に 〉

これは1つのいい例で、本にも紹介しておきましたけれども、皆さんの地域にもそういうものがあるはずですよ。でも、自分たちがそれを価値のないものと考えてしまったり、自分たちのライフスタイルがそういうものをだめにしてきたことがたくさんあるわけです。というのは、みんな都会のように生活しなければいけない。都会の暮らしぶりがいいものだとすることでずっと単線化路線で日本はやってきていますから、お子さんたちにも「お前たちはこんなところに残っていないで、都会に行っていっていい会社に勤めて高い給料をもらっていい生活をすればいい。」などと言いつけてきたのではないかと。大学を卒業させて、大会社に入れるようにきちんと教育するというのを単線化でやってきているのです。だから単線化路線をもう一回ハイブリッドな複線化路線に戻していかないといけないと私は思っています。

8割、2割の関係でハイブリッドな構造をもう一回取り戻しましょう。昔の日本はそうだったんですよ。当然、中国から、大陸のいろんなところから伝わってきたものがたくさんあります。仏教がその代表例です。仏教が伝わってくる前から日本にはアニミズムというものがありませんでした。ですから昔の我々の祖先は仏教とアニミズムを見事に融合させました。それが、神仏混淆（神仏習合）であり、山岳密教であり、今も修験だとかそういうものとも結びついて残っているわけです。

皆さん仏教徒の方が多いと思いますけれども、本当の仏教徒であれば、要するに中国から伝わってきた仏教であれば、お酒を飲んではいけないわけですから、こんなに日本人が酒飲みなわけはないのです。先ほどから申し上げているように、お酒の醸造というのは神道、神道と言うと誤解があるかもしれませんが、アニミズムとの結びつきにおいて日本にあるわけですから、日本は仏教を取り入れたときにお酒を飲んではいけないという仏教の戒律をほとんど捨てているわけです。これは神道の影響だと思えます。要するに神様に感謝して、自然の恵みに感謝して、お酒を醸して一緒に飲まなければいけないという

のがアニミズムの考え方ですから、むしろそちらのほうが強かったわけです。そういうことで、日本人は仏教徒でありながら酒飲みの人が多いわけです。ですからこのようにハイブリッドな構造を見事につくり上げてきていたわけです。

その後、廃仏毀釈とかいろいろな不幸なこともありましてぐちゃぐちゃになりましたが、大昔に立ち返って歴史を勉強すると、そういうことがわかってくる。日本はもともとそういう国でした。ですからそれを取り戻しましょう。100%ではだめだということを言いたいわけですね。「緑の分権改革」というのは、いろいろ突き詰めて考えるとこういうことを目指している政策ではないかと思えます。そんなことをいろいろ本に書いています。再び自公政権になりましたが、平成24年度補正予算では、同趣旨の事業として地域経済循環創造事業25億円が計上されていることは先ほど申し上げました。

〈 法律改正により社会システムを变革する 〉

単線化路線は人、物、資金を全て大企業、大都市に集めて効率的に生産をして、グローバルゼーションの中で勝ち抜くことだけが目標だと考えるということです。我々は鎖国でおくれてしまった。せっかく立て直したのに第二次世界大戦で完全に敗れた。もう一回、世界第2位の経済大国になろうということで経済中心、単線化路線でこればかりやってきた結果、地域はどうなりましたか。過疎過密の問題が起きて地方は疲弊したわけでしょう。農業の衰退の問題もこういうことに起因しているかもしれません。今こそ20%を取り戻しましょうということです。これは江戸時代を考えればわかります。全部江戸時代に戻るべきではありませんが、20%ぐらいこういうものをちゃんと維持する必要があります。地産地消であったり、地域通貨であったり、あるいは再生可能エネルギーによるエネルギーの自給であったり、酒蔵をつぶさないようにしましょう、中心市街地を守りましょう、古民家を使って何か観光をやりたいということ。全てそういうことです。この構造を2割ぐらい何とか残していくように努力をしましょうということです。そのときにどんな課題があるかを地方から提起してもらって、それを法律改正により解決していく。再生可能エネルギーはできてしまったのですが、特に1次産業系ではまだやらなければならないことがたくさんありますね。

〈 再生可能エネルギーの利用 〉

森林の再生も実は簡単にできるのです。危機感が足りなくて法律ができないだけで、法律が弱いだけです。再生可能エネルギーはさすがに原発事故が起きたので、ある意味こんなひどい法律をつくってしまったわけです。要するに大電力会社に買い取り義務を課しているわけです。私ももう屋根につけました。1kwh当たり42円で買ってくれるのですから、誰でもつけますね。皆さんは1kwh幾らで電気を買っていますか。大体20円ぐらい、もっと安いかもしれない。ところが自分が電気をつくったら42円で買ってくれるわけです。家庭の場合は残念ながら全量買い取りではなくて余剰買い取りなのですけれども、でもこんな

に天気がいい季節になりますと、東電から結構な売電収入が入ってきます。電気代は半分ぐらいになりました。でもこれは投資も結構大きいですから、償却には10年ぐらいかかります。ですからもう少し早くやればよかったなと思います。還暦になってからやっても10年たったら子供のためにやっているようなものだという感じがしますけれども、原発を減らしていくという意味でも大切なことですし、これは地方政策としてもすごく大事なことです。

過疎地は今まで電気を買うしかなかった。少ない現金収入の中から電気を買うためにお金を払う。それがみんなで共同して発電所をつくれば一旦、全量を1kwh当たり42円で買ってくれるわけですね。今年は少し買取価格が下がると言われていますけれども、去年つくったものは42円で10年間は買取保障ですから、利益が確保されます。要するに大電力会社から言わせれば、こんなひどい法律ないではないかということです。電力会社は、何で我々にそんな高い電気を無理やり買わせるんだ。一番安くて効率的で環境破壊がないのは原発だと言っていたわけですから、国会に法律を出してもしばらくたなざらしで、審議もされなかった。しかし、東日本大震災が起きて、原発事故が起きた途端に与野党協議が進み、さっさと成立しました。そして、去年の7月から施行されています。

〈 森林の再生 〉

こんな法律ができるなら山の問題はできますね。公共建築物等木材利用促進法というのが一昨年できています。これも中身はなかなかいい法律です。しかし、義務づけがない。努力義務だけなのです。私は民間企業に義務づけるのは激し過ぎるというか、でもこの再生可能エネルギーのことを考えればそのぐらいのことはできないことはないと思いますけれども、国、地方公共団体ぐらいは公共施設をつくるときは3分の1ぐらい木材を使いなさいと義務づけすれば、山は相当再生します。努力義務にしているからダメなので、危機感があって本気にさえなればできます。それを国民合意にして、国会で法律を通すのがいかに難しいことかということです。こういうことをみんなに知ってもらって、できるだけさまざまな法律を改正していく、社会システムを少し見直していく、修正していくことが必要なわけです。

〈 地域通貨、地域ファンド 〉

大事なものは地域ファンド、地域通貨です。地域通貨は結構あちこちやっていますけれども、プレミアムつき商品券のことではありません。地域通貨というのはぐるぐる地域の中で何度も回るものでないと意味がないわけです。地域ファンドはまだまだあまりできていません。でも、今の金融システムだけではダメだということは、いろんな人が言っています。

〈 高等教育のあり方 〉

最後は高等教育システム。これを直さない限り日本の地域から若者が抜け出ていって、戻ってこないという現象が続くと思います。これを20%でいいから昔の藩校のシステムみたいなものをつくりたい。20%は地域定着枠で奈良県立大学でもいいし、奈良女子大でもいいし、地域の大学に入学した人が成績優秀ならば、北海道でも東京でも沖縄の大学でも卒業できるというシステムをつくるべきです。技術的にも可能です。これを2割ぐらい導入しないと最終的にはなかなか地域の疲弊の問題は解決しないと思います。そういうことを国民みんながなぜわからないのだろうということです。地方自治体の首長さんも残念ながらあまり主張されない。

考え方は全部同じなのです。東日本大震災原発事故があったから再生可能エネルギーというだけではなくて、全てのことに気がつかないといけないということを言って回っているわけです。ただ、なかなか理解してもらえないですね。原発事故が起きたからこれに気がついたのでも本当はおそかった。ドイツとかベルギーはとっくに気がついていたわけです。だからできればこれを契機に全ての問題について、ハイブリッドな国家・社会構造にしていけるように、みんなで考えていきましょうということです。

〈 文明の転換点に生きている私たち 〉

「緑の分権改革」がどうしても必要なのかということですが、それは今が文明の転換点だからです。今の文明はこのまま続かないでしょう。皆さん何となくぼんやりはわかっておられると思います。文明というのは廃れては生まれ、生まれては廃れてきたわけで、同じ文明がずっと何億年も続いているわけではないのです。今、我々は石器時代にも生きていない。縄文時代にも生きていない。江戸時代にも生きていない。だから文明というのは常に変わっていくものです。今の文明もこのまま続けられないからどこかで変わります。もう既に転換しつつあるというのが世界中の有識者の意見だと思います。気がつき始めた人もたくさんいます。次の文明はどんな文明かという、過去に学びながらサステナブルな社会構造をめざすということだと思います。そういう風に今後の文明を予測して、それを先取りして対応していくことが国づくり、地域づくりの根本思想にならなければいけないと思っています。

〈 公務員参加型地域おこしのススメ 〉

そして、こういうことをわかって地域をつくっていくことになれば、誰が一番大事かということ、中心は公務員だということです。役場の管理、運営を行ったり、制度を運用しているだけでは、地域は元気になりません。先ほどの「緑の分権改革」のようなことをやらないとだめだということですから、自分たちもぞうきんがけでもいいし、リーダーでもいいから一緒になって地域活動、社会貢献活動をやりましょう。田舎のおじいさん、おばあさんに住民協働とか新しい公共と言っても理解してもらえません。新しい公共というのは

もともと懐かしい公共というものがない都会の言葉です。コミュニティがない、あるいはなくなったところに新しい公共をつくりましようと言っているわけで、内閣府も言っていますけれども、むしろ懐かしい公共と言ったほうがわかりやすい地域だってあるわけです。実践活動が大事だということです。

100の理屈をこねても世の中はよくなるらないというのが私の持論です。実践をすることこそ尊いわけです。私もこういうことをずっとやっているわけですがけれども、やはり実践というものがなければいけない。日本の武士道の精神もそうだったではないですか。善悪ということがわかるとか、理屈がわかることが世の中を動かすわけではないのです。わかったらいいことはすぐに実践することが世の中を前に進めるのです。それが日本の武士道の精神でもあるわけです。そういう運動を私はしてきました。

地域に飛び出す公務員ネットワークは誰でも入れます。今、全国で2,200人以上入っています。これを4年以上前につくりましたけれども、それから2年たって応援してくれる首長連合をつくりました。そういう活動をちゃんと応援してくれる人たちを増やし、組織や地域の全体をそういうムードにしようということです。自分ができなくても応援してあげる、ほめてあげることをちゃんと組織や地域でやっていきましょう。

1月末に毎年首長連合サミットをやっています。松山でやったときに12名、実際に首長さんが出てこられました。ことしは福島県伊達市でやりましたけれども、このときも11名出てこられました。何でこんな忙しい時期に首長さん自身が出てくるんだということを考えていただきたい。目の前の予算をどうするとか、政策をどうするというのも大事なことです。しかし、この人たちは何を感じているのでしょうか。組織の体質を変えること、体質改善こそが本当はもっと大事なんだということをわかっているから出てくるわけです。それをみんなで議論しているわけです。

〈 地域に飛び出す公務員ハンドブック 〉

そういう活動をもとに私は本を書いています。「緑の分権改革」と重なる部分もあるのですがけれども、これは大森先生が帯を書いてくれまして、全国の自治体職員に放つ「横議横行」の勧めと書いてくれたのです。大森先生の講演をお聞きになったことがある方はご存じでしょうけれども、大森先生は日本の漢字の熟語で「横」がつく言葉にいい言葉はほとんどない。横柄とか横やりを入れるとか横領とか横流しとか横恋慕とか、とにかく横はよくない。なぜかという、縦で統率したからだ。これは集権時代の発想で、今は分権時代ですから横が大事になってきたということを大森先生が言っているわけです。横議横行は昔は悪い言葉だったのです。今は大森先生が勧めているわけです。そうして地域人への連帯の呼びかけと書いてくれている。これは片山先生の書いてくれた帯です。総務大臣もやりました。鳥取県知事もやりましたが、自分も自治会で会計係をやっていたと総務省の職員に言っていました。年頭のあいさつをするときに、自分も自治会で会計係をやっていました。君たちも何かやってくださいと。これはプラスワン運動というのを佐賀県が

やっているのですけれども、似た様なことです。そういうことでこう書いてくれました。

序章として公務員十戒というものを昔から書いているのですが、まとめて本に書きました。これは当たり前のことで、試験に出したら誰でも100点をとります。先ほど言ったように、これはどれだけ自分が毎日実践できているかが大事なのであって、頭でわかっていることとやれることは違います。これを貼ってくれている人はたくさんいまして、島根県の雲南市役所は市役所の目立つところに貼っています。長崎市の住民協働センターなど、住民協働センターのような組織を持っているところは、結構これを大きく印刷して貼ってくれています。自戒の意味ですね。私はそういったことを踏まえて、付録に工夫してこういうものをつけることにしました。

公務員参加型地域おこしというのが私のもう一つのタイトルですから、どうやったらいいかということいろいろ書いています。

地域に飛び出すときにいろいろ作法というものがあって、その作法を身に着けるということが必要ですね。過疎地で有名な高知県の大豊町の役場の分散機能というのも紹介をさせていただきます。

今、地域活動をしている公務員の皆さんが横に連携する組織はたくさんできていまして、私が知っているだけでもこれだけあるわけです。すばらしい活動を皆さんやっています。

絆の話は先ほどやねだんの話、命を救うふれあい囲碁については触れる時間がありませんでしたけれども、東近江の自治の精神に基づく魅知普請の創寄り、半田市の戸枝さんの障害者のノーライゼーション、上勝町の話など、いろいろ紹介しています。

地域資源の話は大分しましたから、省略します。ここに国宝十一面観音とありますが、奈良県が好きな理由の1つはこれです。日本に国宝の十一面観音は7体ありますが、法隆寺の九面観音を入れると8体と言われています。奈良県には3つあります。全体を8体で勘定すれば4体あるわけですね。日本で一番多いのです。国宝の十一面観音が3体ある県というのは奈良県だけです。

私は全部拝観しました。御開帳が6年に1度とか毎月何日とかいろいろばらばらなのですが、聖林寺は宝物庫に行けばいつでも見せていただけます。法華寺はたしか年に3回ほど御開帳になると思います。国宝の神社、社殿が国宝というのは出雲大社だとか、ことし改修しているところでは宇佐神宮だとかいろいろありますが、国宝というのは基本的には文書が多いのです。大体平安、鎌倉時代に御本人が書いたと言われるものは国宝になってしまう。ところが、建物というのは当時の様式を守ってちゃんと改築していないと国宝にはなりません。仏像はなかなか難しいですね。焼けてしまったり破損したりしますから。余分なことをお話しましたが、奈良県というのはそういうすばらしいところだということです。

人間力を高める方法もいろいろ紹介しております。

結局、地域の経済循環を最終的に高めていくことで、先ほどの地域ファンドとか地域通貨、ICTを活用した地域づくりも韓国の情報化村というのはすごい事業なのですけれども、

原口さんと私で視察に行きまして本当に感心しました。アレックスという会社がやっているすごい電子マーケットもすばらしいものです。

終章は原点に戻って大山王国の話を書かせていただいております。

昔、「地域旅で地域力創造」という本も書きました。これは地域の人たちとの共著です。阿蘇だとか大山だとかです。最近、DVDも会社がつくってくれました。これは益子町で講演したときのものです。益子町も震災で大きな被害を受けまして、私は去年2回ぐらい行ったのですけれども、彼らはもう一回自分たちが土の恵みに生かされてきたという原点に立ち帰って、地域づくりをやっていこうということで、そこで講演をしたDVDです。ぜひご覧いただければと思います。

どうもご清聴ありがとうございました。